西村京太郎
天使の傷痕

天使の傷痕

西村京太郎

講談社

著者略歴　本名矢島喜八郎。昭和5年9月6日生れ。都立電機工業学校卒。人事院に約10年勤めた後退職。トラック運転手，私立探偵，保険外交員，警備員などの職についたが現在は無職，独身。
第2回（38年）オール読物推理小説新人賞に「歪んだ朝」が入選，著書に「四つの終止符」（文芸春秋新社刊）がある。
現住所　東京都調布市仙川町2の17の4

天使の傷痕

昭和40年8月15日　第1刷発行　¥360

著者　西村京太郎（にしむらきょうたろう）
東京都文京区音羽町3—19

発行者　野間省一
東京都文京区大塚坂下町114

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社鈴木製本所

発行所　東京都文京区音羽町3—19　株式会社講談社
振替東京3930
電話東京(942)1111(大代表)

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

© Kyotaro Nisimura 1965

目　次

プロローグ　5
第一章　陽光の下で　7
第二章　悪戯書き　23
第三章　エンゼル・片岡　39
第四章　バー・天使（エンゼル）　57
第五章　筆跡鑑定　80
第六章　天使の影　101
第七章　フィルム　118
第八章　疑惑の中で　138
第九章　北の風景　154
第十章　案山子と海苔巻　179
第十一章　A. B. C.　204
第十二章　事件の核心　230
エピローグ　260
選考経過報告　261

裝

幀

山

內

暲

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

天使の傷痕

プロローグ

彼ハ、長イ間、ソノ問題ニツイテ、考エ続ケテキタ。怒リト憎シミ、悲シミト絶望ガ、彼ノ胸ノ奥デ交錯シタ。

彼ノ手ニハ、拳銃ガ握ラレテイタ。銃口ヲ自分ニ向ケルベキナノカ、彼等ニ向ケルベキナノカ、マダ、決心ガツカナイ。

怒リト憎シミガ強マッタトキ、彼ハ、彼等ヲ殺シタイト思ウ。彼等ハ、昔、彼ノ仲間ヲ殺シタ。シカモ、ソノ犯人ハ罰セラレナカッタ。殺人者ガ、罰セラレズニイルノダ。正義ハ、一体、何処ニアルノカ、マタ、彼等ガ、自分達ノ犯シタ過チヲ、償オウトシタ形跡モナイ。ダカラ、法律ニ代ッテ、彼等ヲ罰シテヤリタイト思ウ。自分ニハ、ソノ権利ガアルト、彼ハ思ッタ。

コレハ、単ナル復讐デハナイ。正義ヲ取リ戻スコトナノダ。

ダガ、悲シミト絶望ガ、襲イカカルトキ、彼ハ自殺ヲ考エル。銃口ヲ自分ニ向ケ、曳金ヲ引ケバ、ソレデ総ベテガ終ルノダ。彼ハ彼等ガ憎イ。ダガ、彼等モマタ、彼ノ同胞ナノダ。ソ

シテ、彼ノ心ニ、悪ガ消エテシマッタワケデモナイ。
彼ハ、自分ガ賢コク生レテシマッタコトガ、悲シカッタ。モシ、自分ノ知恵ガ、常人ヨリ遅レテイタラ、悩ムコトモナカッタト思ウカラダ。
彼ハ、拳銃ニ眼ヲ落シタ。果シテ、曳金ヲ引クコトガ出来ルダロウカ。彼ハ、自分ノ手ヲ見タ。引ケルト思ッタ。拳銃ノ曳金ヲ引クコトグライ、自分ニモ出来ル筈ダ。ソウ考エタトキ、暗イ自嘲ノ影ガ、彼ノ顔ニ浮ンダ。
彼ハ、自分ノ身体ガ、微カニ震エルノヲ感ジタ。憎シミノ為カ、恐レノタメカ、彼ニモ判ラナカッタ。
フト、彼ノ頬ニ、涙ガ流レ落チタ。

第一章　陽光の下で

1

十一月十五日。月曜日

田島にとって、久しぶりの休日だった。社会部の記者をしていると、事件に追われて、予定した休みが、潰れることが多い。

十五日に休ませて欲しいという希望は、大分前からデスクに出してあった。この休日だけは、ふいにしたくなかった。山崎昌子との約束があったからである。

昌子は、京橋にある商事会社で、事務員をしている娘だった。彼女の休みは、日曜日と決っているが、田島の方は、いつ休めるか判らず、デイトのチャンスが、なかなかない。それを、十五日だけはと、彼女に休暇願を出しておくように、云ってあった。それだけに、急に事件が起きて、折角の休日がふいにならないで欲しかった。

田島は、昌子と結婚する気でいた。知り合ったのは最近だが、交際期間の短さなど、問題ではない。

美人であることが、何よりも気に入っている。だが、骨と皮ばかりのような、ファッションモデル型の美人ではなかった。今年の夏、一緒に海に行って驚いたのだが、水着姿になると、

意外に逞しかった。

昌子は、東京の生れではない。東北の農家に生れた。彼女の表現を借りると、「冬場になると、熊や狸が、家の近くまで下りて来るような」辺鄙な部落ということだった。

昌子は、姉が、地主の息子と結婚したのを機会に上京した。四年前、十九歳の時である。

「だから、まだ訛りが抜けなくて、いやになるの」

と、昌子は、頻りに云うのだが、田島には別に耳障りではなかった。気にするほどのことはないのだ。それを云うと、昌子は、嬉しそうに笑ってから、「もしそうだとしたら、姉のおかげだわ」と云った。

昌子の話によると、彼女の姉は、小さい時から、訛りを直すように喧しく云ったらしい。東京に出る積りなら、そうした方がいいというのが、姉の持論だったと、昌子は云った。

この他にも、昌子は、よく姉のことを口にした。両親が既に亡く、二人だけの姉妹ということもあるのだろう。

いつだったか、「姉に、命を助けられたことがあるの」と、云ったこともある。それがどんなことか、田島は具体的に訊いたことはないが、彼女の姉に対する傾倒は、なかなかのものがあるようだった。

「私は、古い女よ」

と、昌子は、云ったことがあるが、これも、姉の影響かも知れない。

田島は、古い型の女が嫌いではない。チャカチャカした現代娘より、どれだけ良いか判らない。それに、昌子は、自分で云うほど、古い女には見えなかった。新しい知識も身につけているし、優柔不断な性格でもない。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

2

幸い、休みをふいにするような事件は、起きなかった。心配だった雨もなく、からりと晴れた秋晴れであった。

約束した午前十時に、新宿西口の京王線乗場に行くと、昌子は、先に来ていた。

十月中は、郊外へ行楽に出かける人で賑わう新宿駅も、十一月の声を聞くと、さほど気温の差もないのに、待ち合わせの人の姿が、急に少くなる。暑かろうが寒かろうが、決った日に衣がえする日本人の生真面目さが、こんなところにもあらわれているのかも知れない。それに、今日は、ウイークデイだった。改札口も、切符売場も、閑散としていた。

田島は、ウイークデイで良かったと思った。押し合いへしあいや、だらだらつながって歩くのは、毎日のことで食傷している。

「切符は、もう買ってあるわ」

と、昌子は、二枚の切符を見せて云った。仕事に追いかけられている田島には、ハイキングの予定を立てるだけの閑がなく、静かな所がいいと、一つだけ条件をつけて、あとは、昌子に委せてあった。

「何処へ、連れて行ってくれるんだね？」

「聖蹟桜ケ丘」

「行ったことはないが、名前だけは知ってる。明治天皇の何かがある所だろう？」

「正直に云うと、私もよく知らないの」

昌子は、首をすくめて見せた。今日は、セーターにスラックスという恰好なので、そんな仕

草をすると、いつもより子供っぽく見えた。
「駅の名前を見ていたら、一番ロマンチックな感じだったんで、買っちゃったの」
「無責任だな」
田島は、にやにや笑った。
「どんな所か、判らずに降りるのも面白いがね」
「案内所の人に、聞くことは聞いたのよ。切符を買っちゃってからだけど——」
「それで？」
「三角山という二百メートルばかりの山が、あるんですって。低いけど展望はいいし、サラリーマンには手頃な山だそうよ」
「成程ね。運動不足のサラリーマンには、二百メートルぐらいの山が、丁度いいということか」
田島の顔に、自然に苦笑が浮んだ。確かに、学生時代のような自信は、なくなっている。
京王線に乗るのは、半年ぶりだった。その時工事中だった場所に、五階建てのビルが出来、その地下がホームになっていた。螢光灯の光で、ぴかぴか輝いているホームには、デラックスな感じだが、その代り、郊外へ行くという気持を、感じさせなくなってもいた。郊外電車が通勤電車に変ってしまったということだろうか。
改札口を通ってから気付いて、田島は、昌子の下げている布の袋を、持った。何か名前があるのだろうが、田島は知らなかった。中を覗くと、パンと海苔の匂いがした。昼の弁当も、昌子委せであった。
電車は空いていた。最初のうちは、いつもの通勤電車に乗っている感じだったが、調布を過

ぎるあたりから、窓の外に、雑木林や畠が見えるようになり、郊外に出たという気分になった。

三十分ほどで、聖蹟桜ケ丘に着いた。

畠の中に、ぽつんと立っている小さな駅だが、電車から降りると、ホームの広告板には、土地分譲の広告ばかりが、矢鱈に眼についた。この辺りも、土地ブームの波に洗われているようだった。改札口を出ると、駅前に、細長く商店街が出来ている。「街」というほどのものではなかった。写真のD・P屋、食堂、そば屋、それに土地の周旋屋の四軒が、商店街のすべてであった。

田島は、D・P屋で、予備のフィルムを買った。店の主人は、踏切りを渡って、真直ぐ行くと、多摩川の河原に出ると、教えてくれてから、

「しかし、川の近くには、家が矢鱈に建っちまって、行っても面白くありませんよ」

と、云った。その割に、駅の周囲に人家がないのは、地価の関係なのだろうか。土地が高くなると、駅の周囲に、ドーナツ型の空地が出来ると、田島は、何かの本で読んだことがある。

「三角山というのは？」

と、田島が訊いた。

「川とは反対の方に、二百メートルばかり行くと、小さな山があります。それですよ。本当の名前は、和田山というんですが、恰好が三角なんで、土地の者は三角山と呼んでいます。低い山だが、見晴らしにはいいですよ」

「その山よ」

と、傍から昌子が云った。

D・P屋が教えてくれた方向に進むと、可成り広い舗装道路に出た。バスが通っているらしく、停留場の標識が立っていたが、車の姿は、なかなか見えなかった。恐らく、一時間おきぐらいにしか来ないのだろう。

その舗装道路に沿って、暫く歩くと、道の両側に、雑木林が多くなってくる。小さな橋を渡ったところに、駐在所があった。「南多摩警察署関戸駐在所」とある。関戸という言葉から考えて、昔、この辺りに、北条氏の関所があったのかも知れない。

左手に低い山が見え、「三角山入口」という道標にぶつかった。舗装道路から、細い道が分れていて、その山に向っている。

乾いた、埃りっぽい道だった。道の両側は、雑木林と段々畠で、刈り入れの終った畠には、働いている人の姿はなく、薄汚れた案山子(かかし)だけが、所在なげに立っていた。

周囲に人の気配がなくなると、昌子は、身体を寄せて、手を組んできた。

「歩きにくいな」

と、田島は、苦笑したが、勿論、言葉だけのことで、手の方は、かえって、昌子の身体を引き寄せていた。

静かであった。風もなく、晩秋の陽差しだけが、溢れるほど降り注いでいる。暖かいというよりも、暑いくらいだった。

歩きながら、昌子は、田島の肩に頭をもたせかけた。陽の匂いと、髪の匂いが、田島の鼻を擽った。二人だけだという意識が、昌子を大胆にさせているのだろうか。

十分ばかり歩くと、道が二つに分れている場所に出た。この辺りまで来ると、段々畠はなくなり、紅葉の深い雑木林だけになった。

道標では、右が山頂への近道となっている。二人は、それに従って、右への山道を進んだが、歩くにつれて、道は次第に細くなり、生い茂った雑木林のトンネルを、くぐるような恰好になってきた。

樹のトンネルである。歩くにつれて、足の下で、枯葉が音を立てた。木の枝は、伸び放題に伸びていて、油断していると、撓(しな)った枝が、はねかえってくる。呑気に手を組んで歩いていられなくなった。二人で歩ける道巾もない。

「僕が先を歩こう」

と、田島は云い、拾った木の枝で、眼の前に垂れ下っている小枝や蔓を払いながら、進んだ。どうやら道標が間違っていたらしい。が、道が上りになっているところをみると、頂上に行けないことはないようだった。旧道に入ってしまったのだろう。

「君の田舎も、こんな所かい？」

田島は、歩きながら、ついてくる昌子に声をかけたが、返事がない。立ち止って振り向くと、五メートルばかり後で、昌子が屈んでいた。

「どうしたんだ？」と訊くと、昌子は、屈んだまま、脱いだ片方の靴を、振って見せた。

「靴に、石が入っちゃったのよ。もう取れたわ」

屈んでいる昌子の白いセーターに、かぶさるような樹々の紅葉が映って、セーターの肩のあたりが、朱く染っているように見えた。

田島は、カメラを構えて、シャッターを押した。カラーフィルムだから、上手く撮れていれば、セーターの白と、紅葉の燃えるような朱さが、美しいコントラストを見せてくれる筈だった。

靴を履き終った昌子は、近づいてくると、口を尖がらせて、
「いやだわ」
と、云った。
「靴を脱いでるところなんか写して——」
「恰好が面白くて、撮ったんじゃないさ」
田島は、あわてて弁明した。色の美しさが撮りたかったのだというと、昌子も、どうやら納得したようだった。
樹のトンネルは、その後も、暫く続いていたが、細い道が広くなった途端に、周囲が急に明るくなった。
頭の上に蔽いかぶさっていた木の枝が途切れて、陽が一杯に、射し込んできたのである。展望もひらけた。右側が、ゆるい崖になっていて、銀色に長く伸びる京王線のレールと、その向うに、大きくうねる多摩川の流れが見えた。
「ここで、少し休んでいこうか」
と、田島が、昌子に声をかけた時、二人の歩いて来た方向で、唸るような男の悲鳴が聞こえた。

3

田島は、ぎょっとして、悲鳴の聞こえた方向に眼をやった。が、道が曲っているのと、深い木立に遮ぎられて、何も見えない。
昌子の顔も、蒼くなっていた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.